

# 目録の祐



大田ゆうすけ No.10  
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

ところで今議会で最も議論が分かれたのは「震災がれき問題」であった。受け入れるべきという議員、受け入れるべきでないという議員、受け入れは現実的でないという議員と3派に別れた。私は最後の意見だが、その根拠を一般質問の質疑において以下の4点明らかにした。

変革する福山市議会

改選後の6月市議会・本会議から一問一答方式での質問が始まった。しかし、マスコミの報道は賛否が分かれ、中国・読売・山陽の3紙は「分かりやすい」という傍聴者の意見を掲載した反面、朝日は「活発な議論はみられなかった」、毎日「丁々発止みられず」と批判的であった。国会における議論と比較したようだが、国会は閣僚(与党議員)と野党議員による議論であり、敵・味方の関係にあるから白熱もするし、揚げ足取りもする。対して地方議会は行政職員(官僚)と議員による議論であり、その筋の専門家と対等に議論するには冷静さが必要であり、何も大声を上げ、机を叩くことが丁々発止ではない。いかに良い答弁を引き出し、良い方向に市政を向かわせるかが議員の仕事だが、朝日や毎日の記者には理解できなかったようだ。

①広域処理を必要とするが、その量が当初見込みより4割も減った②被災地における処理体制が整ってきた③焼却灰を埋める最終処分場からの浸出水を数十年にわたり監視する必要がある④福山までの運搬コストはトン当たり7〜8万円かかる。これらを受けて市長も受け入れは「未定」とした。そして6月議会最終日に議会として国に対し「意見書」を提出した。議員それぞれの考えは違つが、共通した思いとして「国ががれきの広域処理を推進したいのであれば、安全性に対して説明責任を果たし、問題が発生した際には事後責任を取ると確約するべき」という内容だ。ところが、これをがれきの受け入れを推進する意見書と理解した議員もあり、全会一致で賛成とはならなかった。賛否の分かれる問題は曖昧にしておくことも政治手法かもしれない。